

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770271

研究課題名(和文)「生半可な教育を受けた現代人」の誕生と英領ベンガルの言語・教育・官吏登用政策

研究課題名(英文) The birth of 'semi-educated natives' and the language, education and bureaucratic recruitment policies in British Bengal

研究代表者

水谷 智 (Mizutani, Satoshi)

同志社大学・グローバル地域文化学部・教授

研究者番号：90411074

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イギリス支配下のベンガルにおいて、現地人官吏の養成を目的とする「英語教育」が、1870年代終わりまでには「生半可に教育された現代人」と呼ばれる<落伍者>を数多く生み出していたこと、また、高学歴失業状態への彼らの不満が体制批判につながる不安感を支配者層の間で共有され、彼らの向学心と上昇志向を一種の心理的病理として表象する人種主義の広まりにつながったことを示した。それによって、本研究は教育を通じて官僚を効率的に現地調達する植民政策が必然的に抱えた構造的ジレンマの存在を指摘しつつ、現地人エリートの表象に焦点を合わせた従来のものとは異なる視座から人種主義にアプローチする可能性を提示した。

研究成果の概要(英文)：This research has demonstrated that, in Bengal under British rule, 'English education'--a mechanism designed to procure a steady supply of native public servants--unwittingly ended up creating a number of 'drop-outs' or 'failures' by the end of the 1870s. Colonial rulers increasingly worried that the sense of discount shared among these young men might turn into seditious sentiments. It was in this context that a specific kind of colonial racism arose, labelling the majority of aspiring native youth as 'semi-educated', implying their alleged unfitness as public servants. By foregrounding the colonialist intervention into the question of the semi-educated, this research has pointed to a structural dilemma that British rule in India inevitably faced, whilst shedding light on the widespread existence of a lesser-known sort of colonial racism, which is different from the well-studied sort that derived from of the imperial anxieties over the increasing power of 'educated natives'.

研究分野：歴史学

キーワード：英語教育 インド イギリス帝国 官僚制 植民地主義

## 1. 研究開始当初の背景

イギリスの植民地支配下のインドにおける「英語教育」(政府主導の英語による現地人に対する西洋式高等教育)と現地人の官吏登用の関係を論じる従来の研究は、高位カーストのヒンドゥー男性からなる「教育された現地人」(educated natives)が、現地人の採用をめぐる特にベンガル地方において政治化し、その民族主義的主張が支配者に危険視されるにつれて、彼らを揶揄する植民地人主義が出現したことを明らかにしてきた。こうした先行研究は極めて重要であるものの、「インド国民会議」の発足によって民族運動が公的な軌道に乗った1880年代半ば以降の展開に議論が偏る傾向が強い。しかし、「英語教育」の<問題>を理解するためにはそれ以前の歴史を把握することも極めて重要である。

科研費採択以前に行った準備研究の結果、私は、1860年代から帝国に危険視され、植民地人種主義の標的にされたのは、エリートたる「教育された現地人」よりもむしろ「生半可に教育された現地人」(semi-educated natives)と呼ばれるエリートになり損ねたと見なされた人々であった、という仮説を立てた。「英語教育」を受けることで官僚を目指した人々の多くが実際には途中で挫折したのであり、順調に大学で学位を取得し、無事官僚となって「教育された現地人」として社会に認められたのはごく一握りであったことがわかってきたのである。帝国が問題視したのは、就職難をめぐる彼らの不満・不安が体制批判に転化する可能性だったのではないだろうか。本研究は「英語教育」が「教育された現地人」よりもむしろ「生半可に教育された現地人」を大量に生み出したことに着目し、紋切り型の<現地人エリート>像から導かれる従来のアプローチとは異なる視点から植民地人種主義を再検討していくことを主旨とした。

## 2. 研究の目的

本研究の趣旨は、英領インドにおける「生半可に教育された現地人」という植民地人種表象と、それを焦点としてイギリス人自身によって1860年代から展開された「英語教育」への批判運動について明らかにすることであった。それによって、従来のペルシャ語に変わって支配者の言語たる英語で現地人を教育して官僚を養成するというイギリス帝国の言語・教育・官吏登用政策の構造的ジレンマを輪郭化しつつ、従来とは異なる視座からのインドにおける植民地人種主義へのアプローチを提示することを目的とした。

## 3. 研究の方法

上記の目的を実現するために、関連する一次資料を幅広く発掘し、厳密な歴史実証分析を行った。また、上記の目標の達成に向けて、具体的には研究領域を以下の3つの項目に分けた：

### (1) 英領インドの言語・教育・官吏登用政策の起源と展開

「生半可に教育された現地人」の出現は、「英語教育」によって「教育された現地人」という層を生み出し、白人と比べて安価な労働を統治に利用する1830年代以降のイギリスの言語・教育・官吏登用政策の予期せぬ<副産物>であったと考えられた。そこでまず、そもそもなぜイギリスが現地人を英語で教育し行政に登用する政策をとったのか、植民地統治の西洋化された現地人ホワイトカラー労働への依存の歴史的要因に焦点を当てつつ、その起源を解明を試みた。

具体的には、「英語教育」の起源を、行政言語を従来のペルシャ語から英語へと変更する言語政策と現地人の労働力調達を目的とする官吏登用政策との関係において検証した。これらの一連の政策の主体として最も重要なのは、イギリス東インド会社(EIC)の取締役会・株主総会および総督に率いられるベンガル植民地政府である。そこでまず、「英語教育」の立案・実施過程で、ロンドンのEIC本部とベンガル政府との間にどのようなやりとりがあったのか調べた。特に「英語教育」、英語の行政言語化、現地人登用政策のすべてにおいて中心的役割を果たしたウィリアム・ベンティンク総督(在任1828-1835年)とEICの取締役会・株主総会のやりとりを分析した。

また、この文脈で決定的に重要であったカルカッタ大学設立(1857年)の歴史的経緯を、関連史料の詳細な分析を通して明らかにすることを試みた。同時に、大学制度確立後に、官僚希望者が需要を遙かに上回る形で増加したことが、ロンドンとベンガルの当局にどのように認識され、植民地的介入の対象になっていったかを明らかにすべく関連行政文書を分析した。

### (2) 「生半可に教育された現地人」を生んだ制度的、社会的矛盾

「生半可に教育された現地人」と呼ばれた人々が出現した直接的な原因は、「英語教育」を通して政府に官僚採用を求める現地人の数が需要をはるかに上回ったことにある。重要なのは、需要と供給のバランスが崩れた歴史的要因の解明であった。そこで、帝国が現地人にどのようなポストをどの程度用意したのか、そして官吏任用と「英語教育」どのようにリンクさせたのか、制度史的な観点か

ら明らかであることを試みた。同時に、なぜ過剰供給が起こるほどの制度に多くの現地人が引きつけられたのか、特に植民地主義のベンガル現地人社会への経済的影響との関連を分析した。

具体的には、いかに高カーストのベンガル人ヒンドゥー男性たちの内部において経済的に下層の割合が増加し、就職難と生活苦に起因する悲観的な世界観がカルカッタで広まったかを理解するために、スミット・サルカールによる社会史研究をはじめとするベンガル語の史料を使った近年の先行研究の摂取に努めた。「生半可に教育された現地人」という言説の流布とそのレトリックについては、British Library で史料の収集を行い分析を進めた。

### (3) 「生半可に教育された現地人」という人種表象と「英語教育」批判

「生半可に教育された現地人」という人種表象とイギリス人による「英語教育」批判との関係を明らかにすることを試みた。誰が、どういったメディアを使い、いかなるレトリックを用いながら、「生半可に教育された現地人」の増加を警告し、「英語教育」の弊害を説いたのかを明らかにし、植民地統治の人種的ポリティクスの特質を追究した。特に、19世紀後半に台頭した反自由主義的な植民地統治論のイデオログたちに着目した。

具体的には、ヘンリー・メーン、アルフレッド・ライオール、モニエール・モニエール=ウィリアムズ、ジョン・ストイチー、リチャード・テンプルといった保守主義的傾向をもつ統治者/学者が研究対象とした。彼らの思想を精密に論じるカルナ・マンテナによる歴史研究を重要な先行研究として参考にしつつ、「英語教育」に関する彼らの言説を読解した。

## 4. 研究成果

当初予定していたケンブリッジ大学付属図書館（イギリス）や Indian National Library（インド）での資料収集は時間的制約のためかなわなかったが、イギリスの British Library では貴重な史料を発掘できた。また、思った以上にインターネットを使って史料を収集できた。英領インドの言語・教育・官吏登用政策の起源と展開については、東インド会社の議事録および往復書簡や、カルカッタ大学設立に関する様々な史料を集め分析した。「生半可に教育された現地人」という言説の流布とそのレトリックについては、*Reports on the Administration of Bengal* に代表される植民地政府の文書に加え、英領インドの首都カルカッタで発行された在印イギリス人向けの定期刊行物（*The Calcutta Review*

や *The Friend of India* 等）に載せられた関連記事を幅広く収集し、分析することができた。イギリス人自身による「英語教育」への批判については、ホールズ・ウィルソンやモニエール・モニエール=ウィリアムズといった高名な東洋学者による保守的帝国主義な立場からの主張を詳しく分析することができた。

こうした研究の結果は、3年目に The International Congress of Bengal Studies で発表した。さらに4年目に同学会の機関誌 *Bangabidya: International Journal of Bengal Studies* に投稿し、アクセプトされ、現在校正の段階に入っている。この論文では主に以下について論じた：

「生半可に教育された現地人」という植民地言説が1860年代から80年代にかけて影響力を持ったこと。

それ以前に、植民地政府が安価に植民地官僚を養成する手段としてベンガル人に対する「英語教育」を積極的に推進していたこと。

「英語教育」が、本来その養成を目的とする「教育された現地人」だけでなく、多数の「生半可に教育された現地人」を生み出してしまいう構造的ジレンマを抱え込んだこと。

結果、「生半可に教育された現地人」といわれる人々の数が増大し、希望する官職を得ることができず、いわゆる「高学歴失業者」の問題が無視できない規模に拡大したこと。

待遇に対する不満を抱える「生半可に教育された現地人」の反体制的な政治意識を警戒する人種言説が生まれたこと。また、それが「教育された現地人」に対する人種言説とは異なるものであったこと。

最終的には、1880年代初頭までには、「英語教育」そのものを問題視し、その弊害を指摘する声がイギリス人支配層の間で支配的になったこと。

これまで、ベンガル人の官吏登用、「英語教育」、反植民地主義的ナショナリズムの関係についての研究は、カルカッタ大学を無事卒業し、官僚として採用されたものの、人種主義のために昇進が絶たれたことに起因するベンガル人エリートの政治意識に焦点をあててきた。しかし本論文では、そうしたエリートだけではなく、そもそも官僚にすらなれずに挫折してしまった大量の若者の存在について歴史学的に問う重要性を示した。

一般的に近代帝国における植民地統治は「中間者」(intermediaries)の存在を必要としたことが知られている。本研究は、しばしば「コラボレーター」という呼称で論じられてきたこうした被支配者社会のエリート層が、それ自体必ずしも一枚岩であったわけではなかったことを示唆している。このことは、従来の「コラボレーター」論に何を示唆す

るのか、今後検討されていく必要がある。

( )

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

研究者番号 :

(3) 連携研究者

( )

〔雑誌論文〕(計 1 件)

研究者番号 :

Satoshi Mizutani, 'Semi-educated natives' as a source of imperial anxiety: the politics of English education and bureaucratic recruitment in Bengal, ca.1830-1880', to be published in *Bangabidya: International Journal of Bengal Studies* (January, 2018) [査読有]

(4) 研究協力者

( )

〔学会発表〕(計 1 件)

Satoshi Mizutani, 'The Emergence of 'Semi-educated Natives': the Colonial Politics of Education and Bureaucratic Recruitment in Bengal, ca.1830-1880', The 4th International Congress of Bengal Studies, Tokyo University of Foreign Studies (Japan), 13 December 2015.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称 :  
発明者 :  
権利者 :  
種類 :  
番号 :  
出願年月日 :  
国内外の別 :

取得状況 (計 件)

名称 :  
発明者 :  
権利者 :  
種類 :  
番号 :  
取得年月日 :  
国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

水谷 智 (MIZUTANI SATOSHI)

同志社大学・グローバル地域文化学部・教授

研究者番号 : 19520548

(2) 研究分担者